

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

November
2020

11

「ちやぶだい」を囲んで、美浜まちラボのまちづくり



EVENT & SALON

美浜まちラボのまちづくり

どの地域でも住民によるまちづくり活動は盛んだが、
「美浜まちラボ」は美浜町全体を視野に入れた
独自の活動で存在感を示し、着実に実績を積んでいる。
発足から七年、美浜まちラボが取り組んできた
「まちを元気にする」さまざまな活動を紹介しよう。





まちへの思いが人々を動かす

美浜町に「水野屋敷記念館」という施設があるのをご存じだろうか。美浜えびせんべいの里のすぐ西側、体育館グラウンド・図書館が集まる美浜町総合公園の片隅にあり、代々尾張藩に仕えた河和水野氏の屋敷をイメージして平成12年（2000）に建造された和風建築だ。記念館という名称ではあるがミュージアムではなく、集会や会合、美浜さくらまつりなどのイベントに活用される施設である。

ここが最近、にわかに活気づいている。これまでは主に申請者が利用するだけで頻繁に活用されてはいなかったのだが、7月からは「ちやぶだいいハウス」として定期オープンするようになったのだ。その運営に携わるのが、今回紹介するまちづくりグループ「一般社団法人美浜まちラボ」以下、まちラボである。

このグループは、本誌2018年11月号の特集「灯りに浮かぶ、町への思い」でも「登場いただいたいる。その号では、美

浜町の竹灯りイベントや野間灯台のライトアップを紹介したが、それらの取り組みの主体となったのがまちラボである。前回も少し触れたが、まずはその成り立ちを今一度振り返っておこう。

まちラボがスタートしたのは平成25年（2013）。その前年に美浜町で開催されたまちづくりワークショップに参加していた有志が、ワークショップ後も意見交換会を定期的に行うようになった。その中で「話し合うだけでなく、みんなで実際に行動してみよう」との声が高まり、結成に至った。

初期のテーマのひとつは「美浜町の東西の融合」というものだった。美浜町は三河湾側の河和町と伊勢湾側の野間町・上野間地区が合併して誕生した町である。合併から約六十五年も経過しているのに、地理的に離れていることや、気質の微妙な違いから、町民同士は意外にまだそれぞれの地域の知らない面もあるとか。そんな見えない壁のようなものを取り払うことから始めようと、発足翌年に「歴史」など解き「まちあるき」

「美浜町を元気にしたい」が私たちの合言葉。

と題したクイズラリーを野間大坊周辺で開催した。この企画は五百人もの参加者を集め、大盛況だったという。

ここからまちラボの活動は本格化する。そのひとつが先述の「竹灯り」だ。美浜町は観光の町なのに夜のイベントがない、という指摘から着想した企画で、二十年前から竹林整備と竹炭作りに取り組んでいるグループ「河和九十九の里」と協力しながら、まちラボを母体に「美浜竹灯籠の会」という専属グループを作り、野間の富具神社および河和の全忠寺で実施してきた。今年は新型コロナウイルスの影響で両方とも残念ながら中止になったが、神社や寺が仄かな灯りに包まれる幻想的な光景が評判を呼び、昨年までは美浜町外からも多くの人が訪れていたものだ。

個人と団体を結びつける

竹灯りのような大きなイベントは注目度も高いが、これはあくまでまちラボの活動の一例。他にも、増加する空き家対策に関連する事業、新しい特産品を開発する事業、野間灯台を常時登れるようにする事業（P.08参照）など、さまざまな活動を同時進行させている。そのひとつに町民の縁の下を力持的に地道に取り組んでいる「まちづくり支援事業」がある。

これは、まちラボが美浜町内で活動

するグループや個人をサポートしようというもの。そもそもまちづくりグループというものは、自分たちの専門分野や興味に応じて地域の課題を解決するのが目的のはずで、サポートを担うのは行政の役割のように思えるが、こういう事業を手掛けているのだろうか。

きっかけとなったのは、美浜町が平成29年（2017）3月に策定した「生涯活躍のまち基本構想・基本計画」である。美浜町には、自然・歴史・地場産業・観光施設・大学など多彩な資源があり、程よい田舎で暮らしやすく若者も多いという好印象がある。しかし実のところは人口減少や少子高齢化などが進み、多くの自治体と同様に厳しい局面を迎えつつある。そんな町の活力源はやはり「人」だ。町民がいつまでも元気であれば、町も活力を持ち続けられることだろう。そこで「だれでも、いつでも、どこでも活躍できるまち」に育てるべく、進むべき方向を具体的に示したのがこの計画である。

計画では、町内の団体や個人を繋げること、交流の場を作ることなどが謳われている。しかし行政主導による「上からの施策」では、理念が町民と共有されず一過性の取り組みで終わりがねない。そこで、民間団体からその担い手を募ったところ、名乗りを上げたのがまちラボだった。多くの地域活動グループは集落や校区など比較的狭い範囲で活動する

ことが多いが、美浜町全域をフィールドにできたまちラボならば、まとめ役として確かに適任であろう。

まちづくり支援事業はその年の5月からスタートした。まずは、広く町民にアピールしようと「ちやぶだいいミートینگ」と題した意見交換会・勉強会を定期的に開催。そして平成30年（2018）4月には、拠点となる「ちやぶだいいハウス（通称Chabs）」を名鉄知多奥田駅の高架下にオープンした。「ちやぶだいい」は活動を象徴するキーワードのようなもの。お茶でも飲みながら雑談をするように、誰でも、気軽に、楽しく集えるという意味が込められている。

そのちやぶだいいハウスでは、まちづくり

支援の核となる「住民活動団体の登録」と「まちづくり人材バンク」に取り組み始めた。

前者は、ここに登録されたグループの活動のPRやボランティアの募集をまちラボが発信するというもの。小さな範囲内で完結しがちなグループの活動を幅を広げるとともに、メンバーの増員にもつなげてもらうのが狙いである。

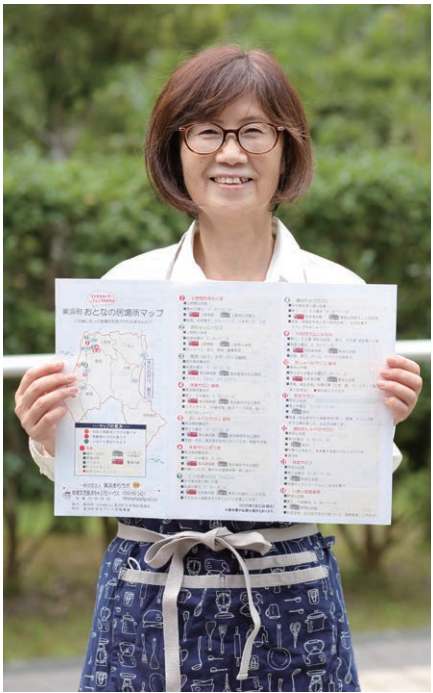
後者は、そうしたグループとボランティアに興味のある人を結び付けるための仕組みで、得意分野や興味のある事柄を用紙に記入し個人として人材バンクに登録しておけば、適したグループをまちラボが仲介してくれる。「地域活動に関わってみたい」「ボランティアをや



知多奥田駅構内にあった頃のちやぶだいいハウス



ちやぶだいいハウスで開催した竹灯籠づくり体験



居場所マップを作成した大崎さん



高齢者宛の絵手紙をする石黒さん

水野屋敷記念館に移り、ますます使いやすくなったと言えるだろう。

居場所マップから居場所づくりへ

美浜町のまちづくりという点、町内全域で居場所づくり活動が盛んであることが挙げられる。ここでいう居場所とは、たとえば日中に家で一人になることが多い高齢者や、夏休みなど親が面倒を見られない時間帯のある子供が、気軽に集まって過ごせる場所のことである。

そのほとんどが各地区の有志によるボランティアが主体となつて運営し、公民館や集会所、JAなどを会場として定期的に開催されている。昨年は一年間のうちに約30か所の居場所が開かれた。地区在住者や年齢など参加者を限定したもの、住所年齢を問わず誰でも参加できるものなど、対象者は居場所



水野屋敷記念館でオープンする「お屋敷カフェcha 茶」



多彩なワークショップやイベントも開催される



ちゃぶだいハウス人材募集やボランティア希望の掲示板が常設されている

町の人たちの居場所は、町のみんなで作っていききたいから。

りたいけどどうやって参加していいかわからない」という人は多く、その一方で団体側からも「活動をするのに人手が足りない」という嘆きがよく聞かれる。そうした声はなかなかすくい上げられていないのが現状だが、美浜町では、民間団体であるまちラボが主体となつて連携を進めることで、住民自身による自発的な活動や交流を地域全体に広げようとしているのである。

この事業を担当する大崎美さんによると、現在、団体での登録は33件、個人での登録は34件にのぼる。

「美浜町ならではのマッチングも多いですよ。たとえば、収穫期に人手がほしい農家さんと農業に興味のある日本福祉大学の学生さんを引き合わせたり、布土小学校からの依頼で美浜オレシジライン（町内を横断する散策コース）に詳しい人を紹介し、小学校の課外授業で講師役を務めてもらったり」と大崎さん。

まちづくりと言ってもそんなに難しく考えることはない。これらのように「やってみたい」「もっと知りたい」という個人のシンプルな興味や楽しみから始まるものなのだ。

ちゃぶだいハウスにあればさまざまな情報を得ることができる。つまりここは、まちづくりの情報発信ターミナルである。そして同時に、まちづくり団体が気軽に利用できる活動拠点でもある。今年7月に知多奥田駅構内から、より広い

るというから頼もしい。

しかし、こうした意欲的な取り組みも、少人数で運営する現状では存在を周知させることまではなかなか手が回らない。そこでまちラボは、その役割を買って出ることにした。美浜町内の居場所情報を集約し、昨年夏に「子ども居場所マップ」を、今年春に「おとな居場所マップ」を作成したのである。

まちラボのメンバーが主体となつて新たに始めた居場所もある。町の南部、豊丘の切山地区で開催する「きりやまおいでんカフェ」がそれ。立ち上げから携わっている石黒節子さんによると、町によるまちづくり関連の助成金を利用してコーヒーメーカーだけ購入し、あとは運営のために組織した切山在住者のボランティアグループ「切山レディース」による手作り、手弁当での活動だという。参加者の中心は七十〜九十代で、他地

区から来る人もいるとか。

「参加者の皆さんからは『いつも楽しみにしているよ』と喜ばれています。スケジュールが決まっていると生活にも張りが出るみたい。それに、この活動を機に切山地区の中でお互いに見守りあい、支えあう雰囲気も生まれてきましたね」と石黒さんは話す。

今は新型コロナウイルスの影響で、多くの居場所が活動の休止や規模縮小を余儀なくされている。集う場がなくなつた高齢者がどう過ごしているか心配だが、切山レディースでは定期的に絵手紙を送るなどして、繋がりを途切れさせないようになっているという。

また、まちラボもこの9月から水野屋敷記念館のちゃぶだいハウスで「お屋敷カフェcha 茶」という独自の居場所づくりをスタートさせた。もちろん、コロナ対策を十分に講じた上での開催で、広い座敷で誰でものんびりくつろげるだけでなく、まちづくりに興味のある人たちが集まる場所になることも期待できる。今後もしここでさまざまな催しを計画しているというから、美浜町民にとつてちゃぶだいハウスがより身近な存在になっていくことだろう。

●ちゃぶだいハウス(Chabudai House)
毎週水・金・第3日曜に開催、10時〜15時
●お屋敷カフェcha 茶
毎週水曜に開催、10時30分〜14時30分、参加費200円
美浜町北方字十二谷80(水野屋敷記念館)
TEL 050・3138・3300
【今後のイベント】お屋敷ファミマ 11月15日(日) 10〜15時